OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ベルナール・ベルッシ著『精神と身体の関係ー デカルト、ディドロ、メーヌ・ド・ビラン』
Author(s)	望月, 太郎
Citation	カルテシアーナ. 1994, 12, p. 127-134
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66954
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＝書評＝ ベルナール・ベルッシ著『精神と身体の関係 ——デカルト、ディドロ、メーヌ・ド・ビラン』

望月太郎

原書名は Bernard BAERTSCHI, *Les rapports de l'âme et du corps, Descartes, Diderot et Maine de Biran*, Vrin, Paris。ヴラン社の哲学史叢書新シリーズの一冊として一九九二年に出版された。版型は変形A5版（13.5 cm×16.5 cm）、総頁数は四三四頁。著者ベルッシ氏は一九四九年生まれ、現在ジュネーヴ大学講師である。これまでの著書に『メーヌ・ド・ビランの存在論』（*L'Ontologie de Maine de Biran*, Fribourg, 1982）、『メーヌ・ド・ビランとスイス』（*Maine de Biran et la Suisse*, Genève, Lausanne et Neuchâtel, 1985 フランソワ・アズーヴィ François AZOUVI と共著）がある。また現在ヴラン社より刊行中の新しいメーヌ・ド・ビラン全集の編者・校訂者をも務めている。

著者が論じるのは十七世紀～十九世紀初頭のフランス哲学のコンテクストにおける心身問題の展開過程である。著者はこの過程を三つの際立つ時期に分ける。よく言われるようにフランス語圏の哲学は時代の自然科学との密接な関係のもとに発展してきた。十七世紀には物理学（自然学）physique、十八世紀には生物学（博物学）biologie (histoire naturelle)、十九世紀には心理学 psychologie の成果をふまえて議論はなされてきた。著者はそれに対応した「機械論主義」mécanisme、「自然主義」naturalisme、「心理学主義」psychologisme の支配する三つの時期を見て、これらの時期の心身問題に関する議論をデカルト、ディドロ、メーヌ・ド・ビランに代表させる。

これら三者の議論の間にははっきりとした断絶がある、と著者は指摘する。新たな時代の到来とともに興隆する新たな科学が明るみに出す新事実を旧い枠組みに留まる思考はよく説明しきらない。実体形相の概念を放棄し、物質のすべてを思惟実体とは存在論的に区別される延長実体の様態に還元し、その生成変化一般を純粋に機械論的に説明することで新時代を切り開いたデカルト派の自然学も、より精密な観察と実験のもたらす新事実の前には万能ではない。例えば有機体には被刺激性 irritabilité や感覚能力 sensibilité といった延長と運動の概念だけでは説明しきれない、デカルト的機械論の射程には収まりきらないような特性が見出される。こうして新たに感覚能力を原理に据えた生物学が構想される。ところでこと心身問題に即して見るとき、新しい生物学は、著者がディドロにおいてその典型を見るような、精神の諸機能も感覚能力の様態に還元されうるものとする唯物論的な主張を含む。これに対してビランは、精神諸現象は生理学的分析の対象になりえぬことを看破し心理学に独自の地位を与える。自我の覚知能力 aperceptibilité は感覚能力には還元されえない。人間がたんに外的事物を感覚するのみならず、自らの存在を意識するものである

という原初的な事実をビランが覚知能力を原理に据えて説明しきったとき、二元論は新たな相貌をまとい再生する。

第一部では、第一章で右に垣間見たような三つの時期の議論の特徴が論じられた後、続く章でデカルト、ディドロ、メーヌ・ド・ビランの心身関係論が個別に扱われる。各章での著者の解釈にはこれまでの研究成果をふまえた独自の見解が散見され興味深いので内容を紹介しておく。

第二章、第三章はデカルトにあてられている。デカルトとともに始まる近世哲学初期の心身関係論の枠組みは実在的区別の形而上学である。実在的区別の形而上学は心身合一の根拠をよく示しうるか。デカルトは精神と身体とが実体的に合一しているという。この「実体的合一」(union *substantielle* を、著者は「機能的合一」union *fonctionnelle* と解釈する。この心身の機能的合一は、言い換えるならば両者の「秩序づけによる合一」union selon l'ordre である。精神は身体に個体性を、身体は精神に延長を貸し与えるという機能をもつ。両者はこのように互いを機能的に秩序づける。ところでこの機能的合一が可能であるためには、とくに身体の側にそれを可能にする条件が整っていなければならない。ここでデカルトは身体の有機的組織 organisation の問題に出会っている。しかしこれに関して運動、位置などの機械論的諸概念のみによるデカルトの自然学的説明（機械論的生理学）はよく答えるものではない。この有機的組織を正当化するために機械論に目的性の観念が導入される。目的に従って秩序づけ・命令はなされる。軍隊において戦うという目的の下に個々の兵が秩序・命令に服し、軍隊がひとつの合一体を形作るように、人間においても生存という目的の下に精神と身体とは秩序・命令に服し、ひとつの合一体として働く。この合一体に命令を発するのは神である。このようにデカルト形而上学においては、心身問題も最終的には神の意志に訴えるかたちで処理される、と著者は論証する。

第四章はディドロにあてられている。十八世紀になると認識論の領域においてデカルトの悟性の認識論に代わってロックの感覚の認識論が圧倒的な影響力をもつようになる。「思う我」は「感じる我」に姿を変える。こうしてデカルトにおいては積極的な意味を見出されなかった認識における身体の役割が見直されるようになると同時に、身体そのものについての把握の仕方が変化してくる。十八世紀の身体論においては有機的組織の概念が中心的位置を占める。生命体は単なる諸部分の並置から成っているのではない。生命体には諸部分の有機的統一が認められる。そしてこの統一こそが生命の証である感覚能力の基盤である。ところでディドロにおいてはこの感覚能力がたんに身体的生命活動の原理として考えられているのみならず、精神的諸現象の原理としても考えられている。こうしてあらゆる人間的諸活動は有機体たる身体の特性である感覚能力の働きに還元される。この点においてディドロはボネやハラーら二元論者とは区別される、唯物論的自然主義の典型的な体現者であると著者は捉える。ディドロは生命体の有機的統一の根拠をその諸部分の挿入成長 intussusception に求め

る。つまるところ存在するのは物質的実体のみであり、精神とは有機的統一を有する物質の集合体である生命体の感覚能力の活動の様態以外ではないと考えられるに至るのである。

第五章はメーヌ・ド・ビランにあてられている。ビランにおいて人間精神は再びその地位を回復する。人間は自分自身の存在を覚知する、つまり自らの存在についての意識をもつ。この事実に唯物論は光をあてうるか。否である。ビランにとって存在するêtteとは現われるapparaîtreことと同じである。「我」の存在こそは第一の現われである。ところでビランはどんな事実も「関係」rapportの資格においてでしか意識に与えられないと主張する。そしてこの関係を考察する心理学は経験的事実認識から出発するあらゆる学問の基礎学であるとする。関係はつねに二つの項の間に成立する原因—結果の関係である。そういう因果的二項関係のうちでも就中第一のものを、ビランは「働く我」とこの我の働きに直接に抵抗していると感じられる「私の身体」との関係にみる。私は物理的な力ではない「超有機体的な力」force hyper-organiqueをもって働く。この「働く我」の力に意識の事実として直接に抵抗している「私の身体」との関係なしには、自我は私自身に対して現象しえない。ビランにおいて自我の統一性は諸部分の有機的統一に還元されうる以上にさらにより強い「人格」personneとして不可分の統一性及び同一性をもったものとして考えられている。この点でビランの把握する自我の概念は、先に見たような自然主義的唯物論の枠組みにも収まらない。ビランの自我は実体的精神でもなく感覚能力の様態でもなく、あくまで生きた人格的な自我なのである。たしかにビランはある意味ではデカルト的二元論に再び近づいているとも言えよう。ビランの自我は精神の働きと身体の抵抗との二元的対立関係において把握されるものであり、このかぎりでは彼は二元論の構図を維持している。しかしビランの自我は、あくまで意識の原初的事実として主観の内部において把握される「関係」において身体と結ばれつつ、この「関係」において際立ち現われ存在するものである。このように意識に与えられた事実としての自我の存在とその相関項である私に固有の身体le corps propre（主観的身体）の存在及び両者の意識の事実における関係を心理学の問題として捉え論じきった者として、著者はビランを位置づける。

第二部は「転換期の諸問題」と題されている。第一部に比べて二倍近い分量をもつこの第二部では、第一部で取り挙げられた三者の間隙を埋める作業が試みられている。実を言えば本書で面白いのはこの第二部である。実際これまで大哲学者たちの議論の陰に隠されていた近世フランス哲学史の細かなひだの一々が、テキストの実証的吟味を通して詳かにされる観がある。

著者は心身関係にまつわる諸問題を、デカルトの三つの「原始的概念」notions primitivesの区分に倣って、形而上学的諸問題、自然学的諸問題、心理学的諸問題の三群に大別し、さらに自然学的諸問題については物理学的諸問題と生物学的諸問題の二群に分け、哲学者たちの取り組みの歴史的展開を、とくに時代の転換期

における議論に焦点をあてつつ三世紀にわたる時の流れに沿って瞥見しながら、心身関係論の変容を論じる。

第二部序論でまずポスト・デカルトの時代すなわち十七世紀後半からメーヌ・ド・ビランの登場すなわち十九世紀初頭に至るまでの議論にあって、つねに念頭に置かれていた三人の大哲学者――ロック、マルブランシュ、ライプニッツ――の見解がどのように受けとめられていたかが通覧される。ロックは心身問題についてはどのような立場を取っていたのか。われわれは精神の非物質性について確かな認識をもっているわけではない。神が物質に思惟する力を与えるということも、その全能をもってすればありうることである。しかし、われわれの事物の本質についての無知にもかかわらず二元論は唯物論よりも支持されうる、とロックは考える。なぜなら精神状態―身体状態の影響関係を認めることは少なくとも常識的経験的認識に反することではなく、しかもそれは物質が思惟を産むと考えるよりもより容易だからである。このようなロックの二元論支持の議論はとくに徹底的に考え抜かれた末のものであるとは言い難い。が、このロックの常識に拠って立つ経験主義は、次に見るように機会原因論と結びついて時代を支配する空気を形成する。もとよりロックは心身関係に関して体系的説明を試みたものではない。これに初めて体系的説明を与えようとしたのはマルブランシュである。マルブランシュの機会原因論は当時どのような評判を得ていたのか。機会原因論がロック流の経験主義と相容れぬと考えていたのは、ディドロら唯物論的自然主義者たちだけであったことを著者は指摘する。コンディヤックを含む多くのフランスの経験論者たちは、ライプニッツの予定調和説よりもマルブランシュの機会原因論の方が経験主義的なものの見方に馴染むと捉えていた。著者の考証は、機会原因論がマルブランシュの専売特許ではなかったことを教えてくれる。ラ・フォルジュ（初めて「機会原因」の語を用いた）、コルドモア（初めて機会原因論的因果性の理論を作り上げた）らの後にようやくマルブランシュが現われたのである。また当時フォントネル、ベール、ヴォルテールらは機会原因論をデカルトの説と受け取っていた。このような誤解もこの頃機会原因論がどれほどポピュラーであったかを窺い知る手掛かりとなろう。ところでビランはデカルトとマルブランシュの議論の本質的相違を認めたほとんど唯一の者であった。ビランによれば機会原因論は因果性の根源的な理解を不可能にしてしまう悪しき方弁である。ビランにとっては有意的運動に際しての因果性の経験――それは意識の「原始的事実」fait primitif において経験される――こそが出発点なのである。機会原因論のような考え方はこの経験の内容を骨抜きにしてしまうとビランは批判する。他方、先に見たように、ポスト・デカルトの時代にあってマルブランシュの機会原因論が一般に受け容れられていたのに対して、ライプニッツ哲学はフランスでは概して評判が悪かった。しかしライプニッツのモナド論はその部分部分の着想が諸家の興味を引いていたようである。とくに唯物論的自然学者たちにおいては、モナド論は唯物論的世界観に基礎を

与えるものと解釈された。一般にライプニッツ哲学は十八世紀フランス語圏においては博物学者たちの有機体論的生命観・宇宙観と結びついた形で展開された。ところでライプニッツのモナド論を彼らとはまったく違った仕方で受けとめたのはまたしてもビランである。彼はモナド論を独自の努力の存在論へ変奏する。

右のように状況が通覧された後、続いて第一章では心身関係論にまつわる形而上学的諸問題の展開過程が整理される。十七世紀的議論から十八世紀的議論への移行をまずもって特徴づけるのは「本質」essence 概念の変貌である。デカルトにおいては、思惟は精神の、そして延長は物体の「本質的特性」*propriété essentielle* であり、両者は本質的に相容れず区別されるものであることはほとんど無条件に認められた。しかし十八世紀の経験論者たちにおいてはそのような認識は自明のものではない。彼らにとって事物の本質とは、観察によって得られた諸特性の集積から抽き出される「一般的特性」*propriété générale* 以上のものではない。われわれは事物の「実在的本質」essence réelle を識らない。われわれが識るのは「名目的本質」essence nominale のみである。このような見方はコンディヤックやボネら二元論者にも、ドルバックやディドロら唯物論者にも、またその後の観念学者たちにも共通である。著者はこのような傾向がモーペルチュイの現象主義へ、そしてさらにはメーヌ・ド・ビランの心理学主義へと展開して行く過程をも分析している。この過程におけるボネの役割に対する著者の評価は適切であるように思われる。われわれの物体の実在的本質についての無知ゆえ、物体に思惟の原理が内属しうる可能性は排除されない。ここに唯物論的自然主義への道が開かれる。これに対してボネは「名目的本質」の区別から「実在的本質」の区別を導き二元論を再び確立しようと試みる。ビランもボネ同様現象のレベルにおける自我と私の身体の区別から物自体のレベルにおける根源的二元性を結論する。こうして新たな形で二元論が再生する。また同じ過程におけるモーペルチュイの役割に関する著者の議論も興味深いが、ここでは割愛しなければならない。さらに著者は精神の不可分性及び物質の可分性をめぐる議論の展開をもつぶさに追いかける。ここでもデカルトにおいては自明のものと考えられていた精神の不可分性及び物質の可分性という前提が唯物論の台頭とともに次第に崩されてゆく過程、そして精神の一性が再び見出されてゆく過程が詳細に諸家のテキストの吟味を通じて検証される。

第二章では物理学的諸問題をめぐる議論の展開のなかで心身の交流のメカニズムについての考え方がどのように変容していったかが解明される。デカルト的二元論に対する批判はガッサンディをはじめとするデカルト派の物理学者たち自身の間から起こった。精神が松果腺に対して働きかけ、その向きや傾きを変え、そうして動物精神の運動に影響を与えている一方で、身体レベルにおける運動量が不変である（運動量保存の法則）と考えるのは矛盾である。運動量保存の法則を主張する以上、心身間の実在的相互作用を認めることはできない、と彼らは批判する。この矛盾を乗り

越えるには、ディドロやドルバックのように唯物論を採り、精神的諸作用をも物体的諸作用に還元するか、ライプニッツやマルブランシュのように並行論を採り、二つの系は相互に独立であると考えるしかない。実際十八世紀フランスにおいてはこうして多くの唯物論的自然主義者が登場することになる。しかし、その一方で、この矛盾に対するなんらの言及もなく自説を展開する二元論者たちが存在したことにも著者は注目する（コンディヤック、ボネetc.）。著者の見解によれば、彼らはこの矛盾のいわば形而上学的処理をマルブランシュやライプニッツの理論に預けたのである。彼らはまた心身の相互作用の「いかに」comment に関する問題はわれわれの与り知らぬ事物の本質に関わる問題であるとし、この点に関する思索を放棄する。が、同時に彼らは「いかに」comment についての無知は必ずしも「どれほどか」combien についての計量の可能性を排除するわけではないと言う。こうしてボネが「実験心理学」の確立を宣言する。ところでここに至るまで心身合一の問題は、あるいは精神的運動と物理的運動との理解を越えた繋がりの問題として、あるいは純粋に物理的運動に還元されうる問題として扱われ続けたのであり、この点に関するかぎり著しい変動はない。この問題に別な形でのアプローチを試みたのはメーヌ・ド・ビランである。ビランはライプニッツの「実体的紐体」vinculum substantiale の理論を学び、そこに物自体のレベルにおける心身の実体的合一の基礎づけを求める。そしてそこに現象のレベルにおける力の交流の根拠を求める。ビランの考え方は最終的には唯心論に傾斜してゆくが、われわれの興味を引くのは、このような立場をとるビランに至るまでの運動 mouvement 及び力 force の概念の変貌過程に関する著者の考証である。著者はビランの唯心論が出てくる背景に物理学における運動や力の概念の変容があったことを明らかにしている。

第三章では生物学の進展と心身関係論の展開との関係が論じられる。ラ・メトリからカバニスに至るまでの議論が取り挙げられる。十八世紀における生物学の興隆の影響下にそれまでとは違った仕方で多くの伝統的問題が論じられるようになる。とくに発生 génération の問題は精神の不滅性の問題に直結するだけに多くの議論をよんだ。後成説 épigenèse か前成説 préformation か（前者はデカルトに起源し、モーペルチュイら多数の博物学者たちによって支持されるに至る。後者はマルブランシュ、ライプニッツに起源し、ハラー、ボネらに支持されるに至る。ビランもおそらくは前成説を支持していたであろうと著者は推測している）をめぐって様々な議論が戦わされた。その他、感覚能力の問題、動物の精神の問題等々、いずれの場面でもデカルト哲学の限界が急速に露呈しだす。著者の論考のなかでもとくにわれわれの興味を引くのは感覚能力をめぐる議論の展開に関する部分である。唯物論的自然主義者らにあっては感覚能力は物質のもつ特性である。これに対して異議を唱え、精神の活動性に独自の地位を与えたのがビランである。『習慣論』においてビランは受動的印象と能動的印象とを区別し、前者が習慣によって減衰するのに対して、後者

が習慣によって強化されることから、単なる感覚と知覚とを峻別する。そして感覚が生理的感覚能力 sensibilité physiologique によって支配されているのに対して、知覚の根源には精神の「超有機体的な力」があるとする。心身関係論におけるビランの最大の功績は、生ける身体 le corps vivant の発見であると言われる。しかしその発見も先行する生物学者（博物学者）たちの業績と無関係ではない。モーペルチュイやボネは、有機体がたんに受動的なものではなく、外界の対象の作用に対して働きかけ返すものであることをすでに指摘している。この有機体の反作用は単なる物体の作用に対する反作用とは異なる。有機体は対象の作用を契機にその独自の能動性が触発されるような感覚能力をもっている。著者は、ビランの語る有機的身体の「抵抗」résistance のごとき概念も、先行する諸家の議論に根を有するものであることを明らかにしている。

第四章では心理学的諸問題の展開と心身関係論の展開との関係が論じられる。焦点は意識 conscience の地位をめぐる議論にあてられる。意識は知識の確実な根拠たりうるのか。意識の事実は精神の非物質性や一性を弁証する確実な根拠たりうるのか。経験論の台頭とともにデカルトにおいては自明性をもっていた意識の明証性が疑問視されるようになる。この過程を著者は「明晰な観念」*idée claire* から「内的感情」*sentiment intérieur* へといった哲学者たちの用いる語彙の変化の過程に照らして跡づける（この変化はマルブランシュにおいてすでに看取される）。感情 sentiment はもはや合理的知識の根拠たることはできない。ところでビランはこの感情に独自の地位を与える。ビランにとって感情は精神の様態ではなく自我の経験である。ビランは物自体の領域に属する事柄と現象の領域に属することがらを峻別し、後者の領域に自我の存在を位置づける。こうして実体としての精神と同一視されてきた自我がはじめてそこから区別され、この自我の成存に関する理論としての独自の心理学が確立されるに至る。ボネにおいてこうした自我把握の萌芽がすでに見られるが、ボネは未だこの自我の本質を「働き」acte として掌握しえておらず、結果として彼がデカルト的二元論の枠組みに留まる者であることを著者は正しく指摘している。

これまでの論考からの結論として著者は、精神と身体の異質性という前提を守ろうとするかぎり両者の相互作用 interaction を合理的に根拠づける途のないこと、それが歴史的に明らかであること、そして心身問題に関するもっとも合理的な解決はいまのところは唯物論によってのみ与えられるであろうことを結論する。しかし同時に著者は、ビランにその典型が見られたような唯心論の可能性も否定しない。ともあれ近世哲学の概念装置に拠って立つかぎり、心身問題に関してはこれまでに垣間見てきたような三つの類型を越える議論はおよそありえないと著者は考える。そして、むしろわれわれが今後思いをめぐらすべきは、近世哲学的思考そのものを支えてきた思考様式に対してであることを指摘して本書を締めくくる。

以上長々と本書の内容を、評者の関心に引きつけつつ紹介してきたが、おわりに評者の感想を付け加えておきたい。以上のように内容を一見してわかるとおり、本書はきわめて精緻な実証的哲学史研究である。しかも従来のような個別の哲学者に的を絞った研究ではなく、近世フランス語圏における哲学思想の展開過程を、心身関係論を軸に細かなひだの一々に至るまで丹念に辿った他に類を見ない画期的な労作である。この研究がこれまでの先行する研究の成果——著者の参照している参考文献には、グイエをはじめとするフランスの伝統的哲学史研究にとどまらず、広く英語圏の分析哲学の伝統に属するものも数多く含まれている——に立脚していることは言うまでもない。が、さらに本書の価値を高めているのは、本書が、時代を代表してきた哲学者たちの狭間にあってこれまで我が国にはほとんど紹介されることのなかった多くの哲学者たちが諸概念の歴史的展開においていかに重要な働きを担っていたかを、われわれが知ることを可能にしてくれるという点である。また著者は歴史を分析するにあたって現代哲学の特定の立場をとらず、中立の立場を守っている。それゆえ本書は近世フランス哲学史のすべての専門的研究者に多くの必要不可欠の情報を客観的な形で提供しうるであろう。

最後に私事にわたるが、著者は評者が去る十月にジュネーヴ公立大学図書館において本書にもたびたび登場するボネに関係する諸文献の調査を行なった際に多くの援助を与えてくれた。著者の親切にこの場を借りて改めて感謝の意を表したい。